

化学新館について

大 木 道 則 (化学)

理学部広報13巻5号でお知らせした化学教室の約半分と地殻化学実験施設の約 $\frac{1}{2}$ を収容する理学部の新しい建物がこのほど完成し、3月中に、移転もほぼ完了しました。この建物の完成に伴い、保存されることとなった大正5年完成の古い化学館を化学旧館、これまで化学新館と呼んでいた昭和37年完成の運動場より建物を化学本館、新しくできた建物を化学新館と呼ぶことになりました。この新しい化学新館について、化学からみた記録として、本稿を残しておきたいと思います。

前にも書きました通り、化学教室としては、将来は現在化学旧館と呼ばれる部分を取り壊して、そこに化学教室の新しい建屋を建てつもりでした。したがって、化学本館は、化学旧館の方にはつながりがよくなっていますが、化学新館の方には延長しにくいづくりをしています。もともと、そのうち旧地震研究所の建物は理学部のものになるだろうとの考えがありましたから、1階、地階はすぐにも旧地震研とつながるようになっていましたが、2階、3階は学生実験室、4階は図書室、5階は講堂です。そこに廊下を作って化学新館とつなげることは事実上不可能です。したがって、化学新館が現在の位置にできるとすると、それは化学教室にとってあまり便利なものにならないというおそれがありました。このような理由で、化学教室としては、あくまで化学旧館を取り壊して改築をしたかったのですが、全学のマスタープラン委員会において化学旧館を保存することが決定され、不本意ながら、旧地震研跡に化学新館を建設することに同意したわけです。

設計の段階においてもいろいろの問題がありました。その第一は設計家(建築家)と実際に住むわれわれとの意見の違いです。建築家は、大講堂

の裏手の風致地区ということで、あくまでも外観を大事にします。それで最初は壁が曲面となった設計ができあがりました。しかし、そうなっても資格面積が別に増えるわけではありません。外観のためにデッドスペースができることは化学にとっては損失ですから、随分と強い意見も言いました。化学新館が一部7階になったのも、実は美観上のためです。4号館の壁面が大講堂の側から見ると見苦しいから、それをカバーする必要があるというのが建築家の意見でした。非常階段が化学本館のそれとつながったのも、苦肉の策といえはその通りですが、その全壁面にタイルを貼って外観をよくするという点も見逃せない理由です。そして、タイルの色が縞模様になっているのは、東大にはなく他でも珍しいようですが、これも化学旧館、化学本館と1号館、4号館との色の調和をとろうとした苦心の結晶です。第二は、施設部の「化学旧館では、改装の後も化学実験をしないようにしてほしい」という要請を受けて、化学実験室を全て化学新館に移そうとしたことです。このために、化学としては希望していなかった、地上6階、一部7階という現状の建物を受け入れざるを得ませんでした。そして、化学新館に新しい階段が作られないことになったのも、ここに原因があったわけです。

以上のように、化学としては新館と本館、ひいては旧館との連絡の悪さなど不満の面はありますが、設計においては、随分とわれわれの言い分を聞いていただきました。時間は随分使いましたが、ここに建てなければならぬという制約のもとでは、ほぼ満足できる建物になったと思っています。

内部設備についても、いろいろな問題がありま

した。まずドラフト・実験台・家具の問題です。このような建物内の設備・備品を購入する費用のことを建新（たてしん）というそうですが、文部省からくる建新は1㎡あたり3000円しかないというのです。化学新館の面積は4000㎡たらずですから、これでは1200万円にしかなりません。これではドラフトをつけるだけでも無理です。古い物でも使っている物は移転して使えということですが、化学旧館にあるドラフトや実験台は作りつけのものが多く、運ぶことは不可能なのです。これらを見積ると、どうしても1億円を越してしまうのですが、労働環境基準から言っても、ドラフトなしで実験というわけにはいきません。化学としては、最悪の場合には募金も必要かとの話もありましたが、事務局の大変な努力によって、ドラフト・実験台・家具什器をはじめ、移転の費用も国費でまかなうことができました。化学教室としては、この場をかりて、事務局に厚くお礼申し上げたいと思います。

建物を作るについてのもう一つの深刻な問題は、事務局から文部省へ要求する建物の種類が校舎であって、化学実験棟を建てるというものでない点です。これは上述の建新にも反映されているのだと思いますが、校舎というのは、要するに入れ物を作るというだけのことです。しかし、御存知のように、化学実験には火災などの危険が伴いがちですし、また地震の対策も考えておかねばなりません。近年、消防署はこの点で随分と神経質になっています。これまで消防署の立入検査があるたびに薬品の整理などに追われていたのですが、新しい建物ができるについては、皆が安心して実験

のできる状況にしたいと考えたわけですから。これには、消防法にいう一般危険物取扱所にする必要があります。ところが、この一般危険物取扱所になるための要件の費用が校舎の予算では出ないし、会計検査でも過剰設備ということにならないかというわけです。この問題解決のためには、事務局・施設部を随分悩ませましたが、われわれも何回も消防署にでかけて説明し、消防庁からも特別の配慮を得て、一般取扱所が正式に発足しました。ここに御迷惑をかけた各方面におわびとお礼を申し上げます。

以上のように、今回できた化学新館は、いくつかの不満を残しながらも、化学教室としてはほぼ満足いくものになったのではないかと思います。4号館と化学新館の間が鉄扉で常時しまっているというのは、慣れるまでは少々異常かも知れませんが、化学特有の臭気が4号館にいきにくいという点ではメリットがあるでしょう。もちろん、化学としてもドラフトの完備によって臭気をもらさないようにはしていますが、世界共通の「化学の臭い」はいたし方ないものと思います。これまでも建築・移転で物理教室には御迷惑をおかけしていますが、建物の廊下もつながったことですので、今度ともよろしくお願ひしたいと思います。

最後に、今後の問題点を考えてみますと、中水道をつけたことによって、理学部には水道料金で貢献ができると思いますが、常時稼働のドラフトをも含めた電気料金は大きな問題だと思います。建物もそうでしたが、ランニングコストも特別の配慮がされるよう関係方面に働きかけることが必要と思われれます。